現代行動科学会誌　第37号，68－71（2021）

【フォーラム―現場から問いかける―】

コロナ禍のオンラインスクール生活で見えてきたもの

敦賀　直子（アメリカ在住）

Ⅰ　はじめに

夫の仕事の都合で、アメリカのメリーランド州に移り住んで1年9ヶ月（2021年3月末現在）になる。ホワイトハウスのある首都ワシントンD.C.から、車で30分程度の郊外に位置するこの辺りは、自然豊かで四季の変化が美しい治安の良い街である。

長男（9歳）と長女（7歳）が公立小学校に、次女（4歳）がプリスクールに入学して半年後、やっと学校生活に慣れて友達ができてきた頃に、COVID-19 のパンデミックによって、突然学校が休校となった。東京都の約15倍の土地に1㎢あたりの人口密度が、東京が1万5,484人であるのに対し、メリーランドは230人（東京の0.015倍の人口密度）が住む我が州だけでも、ピーク時には1日3700人以上の感染者が確認された。夫の職場もすぐに在宅勤務に切り替わり、家族二人三脚のステイアットホーム生活が始まった。

本稿では、子どもが所属する現地の公立小学校を通して、1年間のオンラインスクールを経て登校再開するまでの期間で見た、アメリカの教育事情について報告する。

Ⅱ　アメリカの教育環境について

アメリカは州の自治権が強く、我が州はカウンティという更に小さな自治体ごとに、独自の教育カリキュラムが組まれている。予算が少ない自治体では、体育や美術の授業がカットされたりするなど、教育水準の地域差が大きいらしい。幸い我が学区は恵まれた環境にあり、ノンネイティブの子どもに対する英語教育プログラムも充実している。授業は算数と英語が中心で、その他の教科は週に1回または散発的に行われ、授業日数は日本より年間16～25日ほど少ない。学校行事のほとんどはPTA主催で楽しむ目的で行われ、事前練習などはない。掃除当番もない。そのため、ゆとりのあるスケジュールで全体的にゆったりした雰囲気が漂っている。

Ⅲ　アメリカの教育のユニークな点

我が子の小学校の教育内容で驚いたことの一つは、暗記学習がないことである。スペリングテストはなく、作文の文法の間違いもほとんど指摘されたことはない。その代わり、リーディング教材を元に、情報を整理して論理的に文章を書く訓練をひたすらさせられる。算数では九九を暗記することがなく、図形を駆使して掛け算の概念を理解させるスタイルだが、

正直日本人的には不思議でならない。日本式の勉強をしている日本人は、大抵算数の成績が良いようで、息子も掛け算クイズで一番になったことがある。

もう一つ特徴的なのは、心理教育が進んでいることである。気持ちを切り替えるための呼吸法、気持ちを落ち着けるためのマインドフルネス、ネガティブな認知を修正するマインドセットなどが日常的に教えられ、常勤のスクールカウンセラーの授業も時々ある。見た目や価値観が違うことの素晴らしさについて考えさせる道徳の授業なども、多民族国家のアメリカならではの教育といえよう。

Ⅳ　休校、そしてオンライン授業開始

2020 年 3 月半ばに、突然のロックダウン、そして二週間の休校が宣言された。その間に自治体が急ピッチで新体制の準備を進め、春休みをはさんで三週間後にはオンラインスクールがスタートした。希望者全員にノート型パソコンや WiFi 機器が貸し出され、Zoom を使った授業が開始された。自治体が作ったポータルサイト内のクラスルームを通して、スケジュール管理や諸連絡が行われ、宿題の記入と提出をオンラインでできるアプリを始め、沢山の教材アプリが提供された。

驚くほどのスピードで新体制が整えられたこと、自治体の指針が保護者に明確に伝えられたことが印象的であった。自治体からは、「大変な試練ではあるが一体となって乗り越えていこう」というポジティブな励ましのメッセージが頻繁に届き、一番不安だった時に安心感を与えてくれた。

Ⅴ　続出するトラブルと迅速な対応

とはいえ、前例のないオンラインスクールにはしばらくトラブルが続発した。教員は相当な時間数の講習を受けてオンラインスクールに臨んでくれていたらしいが、教える側も学ぶ側もアプリの操作に不慣れであったこと、通信環境が頻繁にパンクしたこと、パソコン機器の不具合が頻発したことなどで、しばらくは落ち着かない状況が続いた。しかし、すぐに貸出用パソコンがアップグレードされ、画面がタッチパネルにもなるノート型パソコンになって状況が改善された（現在ではほぼ全生徒が貸出用パソコンで学習している）。習熟度の格差解消のため、自治体がオンライン家庭教師サービスを無料で利用可能としてくれたり、夏休みに外部講師による補習の機会も無料で提供されたりした。

それでもやはり、留学生含め何らかのハンディを抱えている子ども達にとっては試練で、家庭でのサポートが必要不可欠であった。我が家の場合 1 年生の娘が、半日パソコンの前に座り続ける状態に拒否反応を示し、ただでさえ自己肯定感が揺らぐ英語環境にオンラインスクールという困難が重なり、すっかり引っ込み思案になってクラスでほとんど発言することができなくなってしまった。3 年生の息子はライティングの課題に四苦八苦し、サボ

り癖もあったため、ほぼ付きっきりでサポートする日々が続いた。担任の先生にとっては心配で手のかかる我が子達であったと思うが、二人とも素晴らしい先生に恵まれ、温かい目で理解していただき辛抱強く丁寧にサポートをいただいたことには、本当に感謝しかない。オンラインだからこそ（そして外国人だからこそ）余計に、子どもの状態や親の考え、そして感謝の気持ちを伝えるコミュニケーションの努力がとても大切だと感じた。

Ⅵ　オンラインスクールの良い面・悪い面

1 年間のオンラインスクール経験には、良い面も悪い面もあった。

良い面としては、家族全員で三食共にしたり、休み時間に外で一緒に体を動かしたりするなど、家族で過ごす時間が増え絆を強めてくれたことが大きい。タイピング力や検索力などのパソコンのスキルも身についた。

一方で、生の人間関係から子どもがいかに沢山のことを学んでいるかということも思い知らされた。兄弟間のやり取りや仲良しと約束して遊ぶ機会はあったものの、学校という空間でより多くの人と触れ合いながら自然に交流する経験は、子どもの成長にとってとても大切なものであることを痛感した。

また、授業中の子どもの様子が見える恩恵と見えない恩恵を実感した一年間でもあった。子どもの強みや弱みを直に把握して的確なサポートがしやすかったことや、成長の過程がよく分かったことは長所であった一方で、その分親が子どもの様子に一喜一憂して精神的に疲弊することは短所であった。学校に登校し、親が見えない場所で先生にお任せできることが、何とありがたいことかということに気付かされた。

Ⅶ　登校再開

登校再開の時期に関しては、感染状況に伴い延期され続けた。自治体が独自に設定した指標を満たすまでに、なかなか感染が収まりそうになかった。オンライン継続のまま学年が終わる可能性も覚悟し始めた頃、州知事が教育委員会に圧力をかける形で、晴天の霹靂で登校再開プランが動き始めた。今まで、この基準なら登校させてもリスクは少ないと信頼感をおいていた前提が覆されて正直戸惑いは感じたものの、長いオンラインスクール生活にやっと希望の光がさした気がした。

登校再開までの準備はこれまた迅速に進められ、感染予防対策・分散登校の仕方・新カリキュラムなどが委員会の投票で決められ、保護者にその都度メールや動画で周知された。保護者会やオリエンテーションもオンラインで行われ、明確な情報提示と疑問解消のためのコミュニケーションが可能な限り的確に行われたように思う。

事前に各家庭対象にアンケートが行われ、登校させるかオンライン継続させるかを選択することができた。我が家も含め登校を希望した過半数の家庭は、低学年は毎週 4 日（水曜

は全員オンラインで校舎消毒の日）、3 年生以上は 2 グループに分かれて一週間交代で週 4 日（登校しない週はオンライン）登校することとなった。登校組にもオンライン組にも、担任が同時に Zoom を通じて授業を行うハイブリット形式である。教室の子ども達の足元には、ソーシャルディスタンスを保つための 6 フィート四方の正方形の印が付けられ、その中の自分の机で基本的に過ごす。場面緘黙状態だった小 1 の娘は、登校するようになってからは話せるようになり、課題にも意欲的に取り組んで楽しんでいるようである。小 3 の息子は、先生から一番近い席にしていただき、クラスメイトとは趣味の話題で積極的に交流しているようだ。水を得た魚のように新学校生活を始めた我が子達の姿に、対面でしか得られない大切なものがあることを改めて実感した。

おわりに

昨年の突然の休校からちょうど 1 年、お隣のワシントン D.C.では日本が友好の印に贈った桜の並木がちょうど満開の時期を迎えている。我が家の周りでも、そこかしこでソメイヨシノが美しく咲き誇っている。希望を感じる季節であり、登校再開も今のところうまくいっているようだが、COVID-19 との戦いはまだ終わっていない。自粛生活の中で見えてきた、一番優先したい大切なものは何か、そのためにどこまでのリスクを覚悟し、どうやってそのリスクを最小化していけるのか、個人の価値観に照らし合わせて悩みながら判断していく日々が続く。当たり前に学校生活を送れることのありがたみを噛み締めながら、全世界で COVID-19 との戦いが無事に収束し、子ども達がマスクなしの満面の笑顔を見せ合って過ごすことのできる日が来ることを願うばかりである。